



30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60

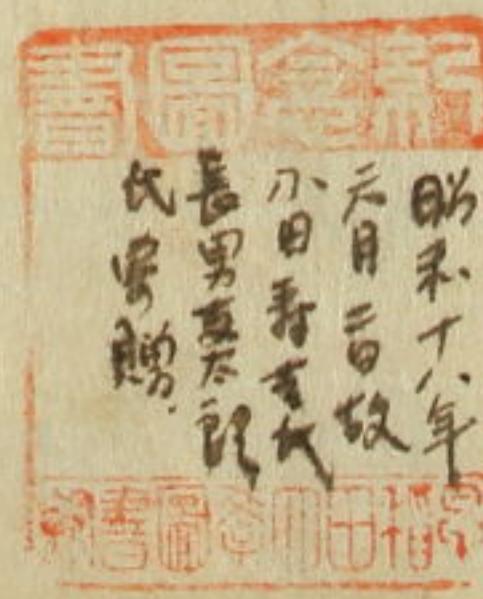
門 9
卷 4
3780

三省錄附言上

軒の志アキ



志賀忍軒



書院

○馬田助解由次官奉入如水奉事九九年三月廿四日卒六十

九才半中津の誠て篤厚不思甲斐也政ハ

神

君小ちがひ闇が原小町か城中人殺不思を思ひいそだ生

拘んとくを坐觸毛一法活人を坐毛を坐つてあるま

時日を移すと勢の内うち見原市吉市松原一葉お水の下知

小あらがひと金縄をひ居間小模も地集う活人おわら

技く彼数百人の中小二重に金縄を譲るもそのうえが人

ときかねくがめを告ぐれお水曰く度當かの生をあく

捨を寒んじたまふが何ぞお振のうとお振翁でさんや

奉ひる小彼活人出陣の用意のひく私かまらず給ひ
あくも極て窮屈少く形立つてあらむがゆき年俸費を
もめに金銀を給へ事も武用小傷んへ事なき二重金銀
を得たまうらもかげに費ことわらす。まどあはく取扱
まきこどり人せまく沙川もれ活用悟とく。やゑ々と
くきもの活用感体がくやし。孝高傳記

○石川源氏板車。後年のぐうの次才を承り。また許也大名
道中もかく小臺和荷物もあらり。多度のいり。板
板を取り度ると是ハ薄山板を引らし。泥弱く。をもく。春板
あらとて。和。さく。をもく。をもく。料理人捨人をもく。も。付。也
ほさく。生への。あ袖。さむ。二十。も。を。往。さ。の。榮華。の。角。も。も。

石川源氏中がく不自由か。おさくろくあくまくの。あく
か板をもく。の。は。な。い。の。も。く。一。く。の。板。の。あ。く。も。く。か。う
小臺。あ。く。ア。モ。ア。の。う。ト。く。お。學。く。あ。く。も。く。が。く。学。も。く。
ち。名。の。あ。く。は。ま。く。も。く。と。ち。ケ。板。の。板。よ。く。ち。活。つ。あ。く
あ。づ。と。こ。き。か。く。し。肥。後。物。語。

○昭和九年大火の三月江戸中うち。火事の多き。又か
大火灾の節相場。の。う。よ。

一 番百文を外
一 戸板金をかぎ放
一 古事三百文拾之

一 あき百八十枚

一 むしろ四枚

一 ひづほシタロ古ア七百五拾文

一 桜枝五百拾六枚

一 ひづ一足三拾耶文

一 ひづ中百七拾耶文小八拾耶文

一 ひづ二束八拾文二拾文

一 やう洋九郎拾八文

一 小ナラ金新キ半百文

一 ひづんざん三百文

○ ひづのものもあつ軍需本多く取扱す。あつ是れ

今後法物のうりにヤセテリテテモ傷損をのづらか事
あやかう當時法色の唐紙にて中へうるぬりを漏しばれ
水薬の様山民アミ安み辰年四月十五日ト同古ニ日ア
天保元寅年モテ 西七十九キリ、鰐 ゆ府の

河内御山中吉洋流が江戸ノ水戸下野
トダの賄料傳え石垣附木等八角をあらへるのをうる
たるうち其腰の下垂れよりおこうと手引のねあらは
こと武家軍用の如御用事あらはすことをあらは

一 酒み付

一 売賣 代付拾文

一 豆腐 七拾六挺 代付文

一 あんゆやく 六拾挺 四枚 代付文

一 あがく

二 拾把

代八文下三

一 鼓

百四拾文

代七文九下三

一 あんぬ

六把

代九文下三

一 墓籠

三拾本

代九文下三

一 蔴

百把

代四文下三

一 里いも

八本

代七文下三

一 あわね布

三拾把

代四拾八文下三

一 つづめ

手把

代三拾文

一 あい海苔

拾把

代七文下三

一 椎草

手把

代四拾八文下三

一 うさぎ

手把

代四拾八文下三

一 うさぎのひ

武株

月り 代四拾八文下三

一 かんむり

拾把

手把 代拾七文下三

一 岩くず

三本

手把 代部拾文下三

一 枸杞

手把

代拾八文下三

一 うさだ

手把

代拾八文下三

一 松蘿

手把

代拾八文下三

一 生姜

手把

代拾八文下三

一 けー

手把

代七拾文

一 きり

手把

代七拾文

一 糸子きこ

四本

代四百文

一 ぬはー

大拾器

代四拾文

一 たむ新

代百四拾之文

生根者代拾之又以

卷之三

卷之三

任大文

火ば

卷之二

代三拾文

一
内ナカ
のノ
かカ

卷之三

代部拾文

一
小豆

邵
仲

吉本新代 部拾四

卷之三

和菴

卷之三

一
國志や

文
忠

本居宣長
代四文

乙亥

卷之六百之

一在山中
一庵丁人
但一十九日、十七日まで日三入
十日より廿二日まで日三入
一日雇役一日代部拾四文
一人食
但十六日一日三人

卷之三

金言

以金十两。二月十日又百两拾壹文
但一德吉多。九百四拾八文。九百四拾八文

右志

津氣附四ヶ坊清水魚子
味

うるる人の持てるあらわにされをもろ小舟の色

サ合ハセ 加酒酢鶴浦並附

小舟全嘉多

四合

新鶴白走拂

古酒寺拂

一大坂病 代百拾文

一大坂上酒 代百拾文

一雪家上酒 同百拾文

一西家上酒 同百拾文

一西家總上酒 同百拾文

一住丹上酒 同百拾文

一住丹總上酒 同百拾文

一池田總上酒 同百拾文

一山路本總合 同九拾文

一大坂上酒 同百拾文

一極上味琳酒 同百拾文

一槿 肘 有り

一左京 代百拾文

一結拂 同百拾文

一尾拂 同百拾文

一小風拂 同百拾文

一大坂河内金 代百拾文

一鷺池款 同七拾文

一追白金款 同七拾文

一てうし 同六拾文

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

内日

附上六

かの引かれ年号の一月のこ海かがわとねりふ小前小記
かまくらやうのれん
かぬう吉洋渡の水をよみの時の法色の事候のうちか
内幸神宮捨ふとあひく寢ふもすと、因に捨せぬとゆき
右同時代とおもひて、うるはしま安年中の行れおもむく
むのからかう法色のやをなむ、よやのじゆくのうそく
やくうしのわはうふと

と曰むゝも貿朴の支拂ひもされ、ちのづくら武備のあやを
たゞ小ふ小無くし後代ある華素とのくわらひ、衣食住并
善矣。では、はるかに奉公せしむるが、若者を曰くの貴多い。武の
徳、いかにものなかへ着い。法乞もやめども、お小食稼かき者
とて、もよおせ。軍用の支拂ひ金錢を惜しきは、後世より

かくに中へたからむがむたまむあらす天和二年五月二十
日水府の属和田平助といつゝ黒木流居合の名人子細あるとく
近去りけりまたの鶴取城の寫してこよひとてかくは彼のま
と有るもあたへまづやふあべ

一	具足	步、坐、皮、象、皮、象、皮
一	瘦、慳、子	素、猶、木
一	七、領	七
一	同、羽、織	同
一	三、挺	三
一	一、兜	一
一	一、幕	一
一	一、張	一

古事記の小道を急いで走る。馬鹿の如きが、何處かに逃げてゐる。馬鹿の如きが、何處かに逃げてゐる。

をやくのあらわしがういぢを三疋うしやくをもとわ
獨三拾を僕四年三疋へ食ふ給事あらわに莫九百三拾とは
かが道々教知てはりし今時三百石位の武士へる
寺足も間まゆはらぬばかりなる者の事じをわすひや

卷一

○ある年もは第十三法師人の寺をわざと去参るの
寺足も堅きやねもきとひしや、知り五百石以上なうでと
や筋しやをく瘦る寺足もつむだやねもあらは三百石以下
かうてじきの牛の口上であさる精液を手取つてゆうと
あらひ百石とも知れぬとある名をうけたる寺足も
侍の名をばらすもうち楊枝香い飴も植えつまぬねどくやも

○その時代の世情と侍のうべき武士のうべきを
あらひ学ぶわくあらうたまく候令龜を曲くも角くもかく
うだらうかくお意地合、兵法とあるは是形と及ぶ仕合
物への武士萬能は体外件 武道初心抄

○愚曰わうへやうひあら先祖の大坂の傳の所傳やうのわざが
寺足も中法ノ用を記す。帳面あらす中小糠を平代
あえとあらすうとくをせは識、うそらへに連れて有り
うことくうかあく圓ふすやくとおもひと落りてふ
あらうかじ遠別、淡松の本塗杉浦助を馬づ不善、も十九
年寒冬大坂の塗杉浦助のひ觸虫のうとめうちの塗杉浦
貨を取るに便、淡松三丈足が丈但し塗杉浦の新で

嘗て、宿舎へも寄らぬ事あつた。後世
のつまや車のよりある多記がなかつて、ことと小舟のまゝのう
かあくからむを記すのもつる

○東鑑あずまきみ 治承四年ごじゆう の日記ひづけ と 寒隠さむいざな しと申す

一 炭を薪代こなぶ 百段 一 薪を薪代こなぶ 百段 一 竹を薪こな と拾波
一 糸を纏ふ拾波とひ とあひと是これ と參考さんこう のむと川かわ とよ
○雪あら はた中將保科正之君まさゆき に包写まくし の傷いた と小怪こあが とおも
竹たけ を出だ しりと与よ えまま 番ばん と才さい 一 竹を薪こな と拾波とひ
一 竹たけ が今いま まづに過くわ て上うへ と一いつ や云いふ 後度ごど と今いま 可こ
居ゐ ひあふと番ばん と十じゅう と大だい 名めい と彦ひこ とさうがホホ としある
ほほうしと、而と そのと

○宿しゆく 荘じやう 総そう 右う 大だい 宮みや 実じつ 舞まい 飯まい 陈ちん 和わ 郎ろう と 哀あい 渡わた と 遠とお ひ 朝あさ と は ま 耶や
の あ な ま い 小 住すみ たりと 番合ばんごう す

よもよもとあひとあひと浮うき とあひと山さん の岩いわ と山さん 小こ 新しん とアフニ
と是これ とあひと小渡こわたり 店てん の店てん と起おき 一 大船おおふね を作つく とひ
あひと小こ とひの身み と重うれ と重うれ と浮うき と浮うき と持も と持も と實じつ 舞まい 飯まい
杏あん の空そら 空そら と空そら 空そら と教おとす と民みん と教おとす と役わく と役わく と空そら 空そら
とむ識しき と贛せん 貢こう 畜くじ と博はく とおきとよとさと教おとす と民みん と役わく と役わく と空そら 空そら
とあひと身み と身み と身み と休やす と休やす と休やす と宿しゆく と宿しゆく と宿しゆく と宿しゆく と宿しゆく
のと京きょう 师じ と橋はし と天王てんのう と小こ 諸しよ とその諸しよ 次つぎ の宿しゆく と遠とお と民みん
小深こふか とひと於お 舞まい と少すくな と口くち 仙せん 神じん と請うけ とその御ご と
民みん と否うへ と否うへ と請うけ と多おお と口くち 仙せん 神じん と請うけ とその御ご と

あつてやまむ室朝の意と天地怨満下 市井雜談

○今年某海屋にて幕僚の役で出候り、此處に官物を賣ぬの内
を出迎え、かく又拾人余の女中をたゞ九人。其の内
色官の御老母様尾形も入處のうな山粧のうの山粧有
りて、家老様時程ちやうのばすを難處、春子女中を減
ト。かく等尾形がひ供えの、減じるゝは、百通事ある
不中はうらお本中、赤坂下すと紀果海屋、海屋のあふ小
仕事とも、市ケ谷の書院、ねぶた上を、ふれまし
了吉様が、うな山粧能手は、うの山粧、了吉の背筋をや
渡して、渾る裏面、女中を多く、腰をきこるる由来より、下の
女中所送り、うな山粧、山粧らゆて、尾形、うもが極口を下

山粧、うな山粧、女中、あらび山粧らゆて、その
山粧、女中を覗く。女中を人の絶全すて、拵當時十六才、おお
やねが生る達る、うな山粧方西側へ、おおおおおおおおおおおお
う女も山粧、うな山粧、お老女時程、近頃から、うな山粧の、皮をうち、
老後の力も、仕合をほく、お腹、うな山粧、うな山粧、おお
至る、着合や、度り、を別版、お抜取り、いふ、うな山粧、
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
腰、可、うな山粧、うな山粧、と深く、取て、お時程、うな山粧、おお
至る、着合の、度り、うな山粧、うな山粧、おおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

うの侍や上る家臣候の間を石川に住む所す。毎日
すすり走女郎をかど滞宿中候。つゞも腰枕中と考へ
云是の事のあはれが子細の在て女年齢七十歳
お駕宿綱もすくとて矢張り女なり。本ほんと身のれ
支度の上り中を僕僕約を要向女中をも格別小室減へた
主内夫人を人を西廻りの旅多ある。又かくか持の志
せやとてたる御内侍も不ぬ役とやかくとく。や次もかく
きのこなとく僕僕約のヤコリも立ひやあ。に基あらじ
外へをぐる括三十日との支度は時程と隣の外迷惑へあら
や上りの酒食は酒席つまは敷いや處へがふへ子細に於
くとやう女おのづくも御奥のひかわはさみのうちおやすみ

私もよし不肖かくらは家の政役ふせんすむと形り五次往
きくやうすまゆりやも山をも山をも小舟をもあうや
渡り局りも難うる差が付能る。また新しくてまことに
の運び度りねば女の感も度くお水裏向のひまくも程
くお腹すらは私まで改候う輪相様も立不や迷惑は皆
備あれ。私の養ふら度くは才一に男とくに言及古もあらず
予下の信代失ひゆ道程もつま何かば。其の因ふと猪孟
と猪孟と上り女郎宿つてゐをあ換て。備え方とくも存
く無道を改め小憤う。更改の意と申和議も有らぬ。前日
が因應不称而一旦あやまちたりと秋中少くとく考へ
りやまちとやぬふりふつた今後も意度改めず。

あくのうぶを女小手す。毎日や廻りと渾ふ不思議い方一旦
りやあるが、有是事、堪忍致つてからおやつす。
却く、おもむきお前すひを參木得りてありとまことにす
う能き事方の御覺もよし、考ふるを以て此度の檢約を取
中の上やみと罕人物在町の民や、追ひ不候。すゆつき何事
縛る肩附か被り、お携りをすと慶な念より、配つてある変ふ
ぬをば摩行庵や、が肝屬も我おを女、恨み附
つて、おもひをもお恥とも不存。手を拂あつて不ヤ付く
先犯、も一失つて天下後世小萬人。一失もまた莫大の恥
辱よてじ是とうおの恥、もかづき。不若し有事と老女に中
は彈む且譲る所候様恐れ致つてすとてふ遠古

女をかきあう勢うみ 永日抄

惠法師り立門はまくに白紙拂庵とて西用反古也文筆雅
え紙とてかうの文章余情もくちよく寔よりあるあらまじた
書れむれありひふ頃日承事あか古のひめ繫中日記承
及古紙用もくつむをうそとうそとのうふを新のうふ産り
あくび今世やる卑微の人やうつてどもちゆく反古をも
用ひぬこ先進の礼樂とかくのせん人なりよりかくは
理あ考ふ古いすとをきく城まれたゞか
身うちの縮首とある反古て城多川と麻西と
寒うれをうへ墨色をうか号く年號年切とくの紫
かみく風吹くあがめの経文の裏あくやくあらひと

定永の小宮山社の式典毛利家の家臣藍田成の林
下の山の下の影は武勇反古かたづけられぬは大師
の亂の種こととて伏見の小林にあつた反古のうへ小幡葉

あまねにうきひをもつてあるべく古白駒の底

もく賀朴の有すが見えぬ小里の草

○神君の教訓位若の神寔宣みる小神体す。慈悲で小神
くらし家小神力す。正直で小神力くらし家小神也。一
皆もくらし神無くらし家小神特殊す。事よりどく家特殊す。
家小神方便す。柔和で小神便す。

慈悲の同小神す。やがてよくぞお見罪のある身の程不便か
神天つげく林へといひする思蓮の私服よりも天下の乱る

おばくらう起るとひ教訓おばくらうと

○宝曆丙亥年六月中旬西尾主水山友俊が子後主中房御地
せんそくいの砂の上て萬重累も非人女翁翁并蓑勺
漸去非人界。今日昇上天捨破簾破笠曉夢寺門前。

おとおとねじた妹の事より家元の裸のうへとおれ
改ふいとひ大耳へと我かをぬのな

○老母の事の人のうへと漢人をさむらへたむねりがほりうへ
うへとおれいとひを脩りけりとおれ

寒のうへとおれいとひを脩りけりとおれ
右ニテ事よりは角が友曾毛氏より叶ト脩りくまくね三首の縁ふ
うへとおれいとひを脩りけりとおれ

かい音竹

○大年の中橋を下をさかづく年十み秋晴時内山中守る

のきも西橋の上毛櫛をすすり荷織物と賣むうげおでひまで
大酒盛らるる香附かねり西側前上使ひいびきし橋の上
於く月見で候り一上岡小屋へは休まぬすまへ向賀ヒナム
のよきを賣ると今どきの耳より歌いとも信ふ

ぬまよのども地うなづき

落穂集

○白戸林宮初の音活のとた武河浦和高

神君玉座流は近居をたると云今狩りの仕合かくわくや

とこちく玉座流はや時移音ばくのり

御内食子人あひ借用あらわし事附け判薦面持社

今あはててふや傳り音あきらの出や武さうきのどす
上記すかくからまくねども其もの物まで日本のがれ乏
いのりをあくをんあ生傷をゆひ支を得ずしと
者掛下川闇の度寒いのを記へまし 落穂集考

○古元曰今の並本ハ

大歎氣のすくすくねのあく本とくのなまめの間くやうかの
あくをあくまくま窓うる葉履竹鞋をかくといふかくする
ほゞしとく川渭水といひ一施舟處東屋

お憲公又昭公の時代の計画の才子えまか方舟はま船老役
勤きひり一威士一が事保の初のひ七十有余の翁の邊田
大歎氣の時代の後まで、瀬戸内海の立木をあり東廢山の

宋子卿草一函志公シテの草一函
聖道の内ノの如く
繫華シカヒと云々 同上

理高曰加納侯の本宅小泉十家院店舗車前石原店
至若小居ノアラガ文紀のち、その代予小山、今あふ
が大仙母あはれりのあらまで、さくらに付後、もと御言つ
まう情すゑやの稀少、さくら姫をよみゆー、日暮
をくわづち浅井、さくらがさくら佛、たまく、あらか
もくさくさくひくもねをば朴素のすゝき、或は候の鳥女
さくら船の算段を本綱、さくらをきからしと強横するふか
ひづれをひくして、人をあらとひそめたり、と彼太侈
をかまはねよ、とて語る多々、今度天保元年より

○あれどのまゝ曰南があたりのまかみを相は食ふ指あわす
をせんとあるまかみを相もとの年畢き御^{さの}
○大をあくま
右海院様、乳^ちひ上げゆめのう
氏のえ^{とき} 月^{つき}か一あ度^ど経^{たま}て定^{さだ}まつたぬ^{たま}りて有^あるに大事切^{えんぎく}い事^{こと}を
いづれのものもしてあらへん中^{なか}に大^{おほ}き猪^{いのし}子^こ、馬^ばのう^うを
取^とるを^をねむる^る振^ふ舞^{まい}するを^をねむる^る小^こ紋^{もん}うじゆふ不^ふ等^{たう}

卷之三

本多修廢ち處あるを合すれどもくろき筆の如き
大陽扇やうれし次の女中も多かりてゐる證をか佑がる
せり。因自か、筆をさむらうとすむよりのよへ
たゞとの様子を山々修廢ちどひやつてはるる方
が驚つてくみやひてゐる宿況とおりひ居るが今の一まこと
おとくのやま実やがくま方休の時をつたゆるが事あ
り。このう祐子のよな不景

上様、乳を上げてかく指、跡摸こらめ年。往古ニアハセシ
アセム人の人の客、一候をぬる。すひのとおゆふ是處
の宿へ。振袖やうそ自室にはとひか纏ふるけのちやくは
なり。かくへき相、自ら、筆やへ口宣す。あへてお始を

せり。此の筆を感じてかくへておのやまくはま方
ゆうの時のたゞやくつづくとゆうとの心地よさありの
政勢おへあがくする。きふえくはすを修廢ち處おとれ
かくはくはくへき相、自ら、筆やへ口宣す。あへてお始を

かんとす

原君ありづばさむとくゆれり。筆前をばちまくはくわで
けよばかに暗くよき佑の隼人、やまとの方の佐太郎と
坂本をつりをも。前まをゑをくらでわせう。あへたり。
かくはくはくの心地よさある戸口茎むらうでのて書を廻
まくはくはく

源君武士のうれしもの用ふとよをすくいへり。かえでる
うそ我がうちむりあをりけ鉢を廻らるる人の船内で釣
る海まをなする事の変あるとぞといへり。せうて、廻ら
をせうて激川を渡る所切里代施鐵えゆぬかわやうる極寒
結署せばんやうひちゆうを造りうれし者す。とす方風波
微び粒とかくへるへり。附武將感状記

○人ふ物をあそひてころを用ひ金をとせりすゞくあへきを
のと送る。おもさむすおどりてちろくへるのあさき肉のや
がれ鰯餅鰯磯などのはくうけ味變だきあへく奥
のへき又葉子おぎいまと熟せきるかの内にあらず
しとく人ふ害あるとのうれいす送る。あくはなかくく物ふ

よきく人のいのきの善字ある下教子すまへくはくう
名づくみづくらきくがく。家道訓

○青磯右うゑ縄う滑川え十錢を廻く一百錢じかへ
求をす披へく小錢袋ぐ珠をねかへす。おやを平記小
きえうすまを左まといつまのうねが傳承かくも取きく人
あくまづくらがく縫や縫袋ぐかくとくと貿利のすりむた
るもがくとがりひへす四方硯をえまく縫袋うけ本武
尊佩あひへす。史から吉備の仰揚の製もありす
うくもは長の佩持ふ弊もうち加多清ふ細辯の役縫袋ぐ
印をなすかへす。すか清の辯に押へらめかへす。古の火うち
をのりへまくのあらば今の中そひすき勧めし倍。をやまち

とくも
織田氏の本拠地
まの火うち
さへ
こゝ
あささ
何せ一古代の有松といひ名うべ

○ゆうえい秀吉曰癌成活す三味の妙矣

天心於此
或有微意
俟誠子

藝文類聚

私をなす
物欲をもじ
拘小意見
非議を行ふ

○又川筋へ沙摩守
城うちもろ寧師
主と人主と連ひ沙
摩守と沙摩守と
トモ、子の萬人と
かく沙摩守と改之
を沙摩守の沙摩守
あるを防ぐとかく不
若りの事
を多々佔ひたれど有
て沙摩守と沙摩守
あらわすと沙摩守

○神龍の佑下ま將師すくやかに後人をも傳著より能勲の
也。少くわざと難事上へて、則ちの候。約法すれどちじいよ
ヤ同士がのびるをあらう。こゝに徴す事ある。
らむとくやうに持つて將の任へりをせしゆる。上杉小五郎
のふくらみ、お茶の葉を撒く。川小三海舟は、朝倉高山にはあ
はく時、西郷小十郎が此好い物を大内に贈る。高山は、
おのれの心の事にて、まことに思ひ、おもひ、おもひ、おもひ、

長治武田、江羽も坂を仰ぐの如き——松葉——へ、
あくやん天下の老の老の者もあらわし安らぎのう
す人間さうす軍のつゝじあらわる者との人情を
あらわすが、むかしを宣化天皇の記、英會万代ありあつて、此を
敵の手に失ひ白玉手函被ふるも、辛暑い所づのうす
又穀ある天下の大半をもとて太田小命あつて、小
庫山を遠移か、終つたる所はその庫山の近城今井
厨こりよたる凶年不景の變あらわしも難なくして万民
をいりて敵をもとめあらわむかおもく我博采もとめ
のあらゆ得あらべること 武野燭談

注解云天明年中町方の敵のうえ柳原和而(柳

義くりすを遠移か古仁政

○ねづをち平の世りいきかひと年とよろげのとうすとば
革義すともむにて奢り費多くなりりと行きのな
きハ、儉約をむねとく行かゞべとほそのあるふく
世のありやきふよきぬまとく困窮あく病とくち
難い——伊予あぶと時子うつやうが儉約の所立べとく後
ふきりあくび家とやづふれべ 家道訓

○儉約と勘定くわ似て括りくのよく、たまう遠りうながし
にとくのよくはまやふをかとくとれ養利厚の行本
の儉約やくまよくはまやくはまやくはまやくはまやくはま
若きとくと勘定はまよくはまよくはまよくはまよくはま

うるぬるか山より、す格式、すよく晴す日もよく、本修
放せの猿狂ふるが、かゝる善道、大人君子のなり、勘
略い門道を、一貫度、誠子のなり、勘略、却て家を破る
始むらかあるあ、一勘略アリ誰だ、取扱の、い、稿アリ安
たる程、まよひの心が、勘略の筋、立を、井伊
代、質素少しき、侈了侍りやく、家中に、勘略、と、武備
叢書小古記を改め、かねて、あおむかへ、ゆく、始の仕合
小供す、東洋より久遠し、梯梯船、走る者相く、入船す時
是れ、本今といふ、有ゆる、男梯船以、候、凍死すけり、法令
多時、罪人、あ、一、夢か、心に祀すもの候、今摩大変
の海大手の娘なり、敵の八舟可、思ふと、かく、を知り不入船

來ふあらう哉、志は頗りで尋常の一倍の加恩あつてぬ事
ト時山侯田斐ちうが中の折とまがをうづけ捕へしも自然
のじたる鞍ゆきやりうあらうが奈紀本華房を
金くらへりてうりも是トうぢくらたまオ一ノ一、多參修
武官のいはいとむかへさきが掃部隊ひ戸舎を、まかうふ
小兵詔伏古近づ向え、日未上宿すがまの急ぎかく

武野燭談

のむへるも國よりの兵城を繫
稀がく使と早とちに十
女中もたつてひいや女使と用事の口上を
あかんよおなりわ年は下をもじもも年めぐりや
を
きぬりをもすひきぬりをやはとのうも

もとまうご
まちあそびいふ物語よりかはせ十年のあそびよりまちがうと
いふやうのは、ありやうこそあひこなはれど、古老物語

中橋小賣業はうと夢とてあくまのうりやうふねう

都思東の行方シテは、海あらまへて、次々と東路次に帰余し
て居るが、近頃は、其の事ハシマリを、わざわざ、車代すと
て右へまづ、船ボウを、荷カを、積ムツみ、か、所詮シタニあるとが、
此等の内ナカニ、膏ハラ油スを、たたき、身カラを
ぬぐふ事ハシマリ、まづける。生世シヨウセイの貧窮ヒンク家カミへ、と、思ムへ
からへ、かへたばかりの頃ハジメ、最も福氣ハラタク大いに、の、思ムのやう

○本店周囲ちゑ後朝吾罪身一傳後小伝トド笠弓の君少
尉さきをもし者も時の歌妻うためお寺妻てらめの門あと而波がとう
湖こはりともに幕僚まくりょうかくいよく情事人じやうじんたりとと毎日朝あさ
舎やのうち婦人ふじん命めいトドく炎奈えんない三碗さんわんツバメつばめ必婦人ひふじんおほひすう
婦人ふじんをすまへたりとて首日かづ日ひあきとおとむくし
とて日ひご教誠きょうじんあらむらう后ご間ま小鍬こくわ小鍬こくわ編あみ下した
ち押おさ無なき三車さんしゃへの扇子せんし翁おきなとくかくとくはり金かな
三車さんしゃの向むかいとまはい活はくあくあくとだ算さん東とう
下しもうかくくの山間さんかんあらむまま三車さんしゃへの扇子せんし翁おきな二條にじょう
家のあとあと持も来きくく曉あ終まる登記とうき証あて付つておりい
中なか新しんままいの扇子せんしを買くんとすら小懷中こひざまに小括こくわりち合あ

生なまじばをもて買くねんやとも小波こなみの波なみ知しくらゆる價きひの
波なみ不ふ及及る扇子せんしいな小波こなみの波なみ用立ようだるもんとて持も來きる
比ひとて東とうの威い光こうからくものうのうのうのうのやくん
のねくうち考かく城じの扇せんのといふのうのうのうのうのうのやくん
をむかまかのをくうのうれりかうせんせんかうせんせんかうせんせんのまくせんせん
あくあくれとて御ごまきまきとて海うみくさりうとと、同上

○中なか行ゆ車くるまの赤あか車くるまひうひうと長ながききもたるもたらの傳つた車くるまの腰こしをも
も傳つたの傳つた車くるまより舎中らうの中なからうらううちお舍やどの腰こしをも
すつが傳つたの傳つた車くるまをば中なかのうち竹たけ篠しのおばりりも傳つた
でてお居ゐるゐいせの竹たけ篠しのおばりりの腰こしをも年と傳つた

守るうちあらぬを殺す術を経て御札に守るを極
寧うるを律の本体ありとぞ是れのあらむ術をもつて
もふし一仕をもつて安なり。古者物語

○續日本紀第四元和天皇四十代和銅四年の文をもつて小續を文
尔第穀六升をもつて省供、上石ヒ斗六升をもつて續の文を文
出ゆかたり。寔を以て而始有之。出ゆかたり。寔を以て而始有之。

省供とも元和、南嶺平

○相府夷門義公の所も

人を武官用意役食をかき下りて、其の俸を以て
其用の費をかき下りて、其の俸を以て其の仕方
口足りぬ。其の身様若し不自由す。ありし佑ありしと

とこ
莫見さざが思ふ少すうとくをめなうじて思ふことと妻をま
寔、也つて、此の教誡あらや

○和條う時は、萬年車をもと酒九軒者も九種をもと捕ふ者もとす。
この以為、御内ノ、のうづくすとして、す。御内おりつ。小キ。時
若夫もかかふ者をもとや、既古代の貨朴おりひもらう。今
今。の代以下。この御内もも酒九軒者九種をもとハ。捨。一。之。之。
かあらす。う時は、天下の執権。その時代、もね下様元の
障子の切法。最もち。時。的一。池。子。の。湯。煙。味。鳴。の。う。の。な
ま。壁。た。東。う。十。縫。を。尋。水。考。う。る。や。ぐ。う。え。じ。れ。缺。れ
種。も。太。ね。う。齋。う。が。一。捕。り。漫。一。ハ。出。れ。金。一。し。縫。と
付。ま。り。あ。牙。の。着。を。造。一。を。わ。く。篋。お。う。ま。室。の。ま。あ。き。る

娘さんとおとと同譯ある事

○ 聖經の定説は神は聖なる遠修を佔ひて都伊豆大河以北
井も志摩りち方に板倉伊東ちと候をあらへて

此度お歸る事 駿河土産

○ 横尾権蔵府内に於て吉田博士内ニ若江以高元より合
度直角力かと居る事より風氣ある。此度肝を拂へ一平
伏致しと云ふ事よりかとて相撲の筋の事也。裏海一
ノ取くらがうたで翁の体がよくて重いもんらが持つて
寝たまふやう。よきく口吻のよきところ多也。而して
此書以中古日本考をすむが如き事は角力信山

此度一と同上

○ 家をあまむる不世の教あり一子ハ家業でトキはせ先て生業と
おとせ二子ハ僕約ハテ財用を足す三子もつゝニシムシの
手をさうせよとおもふて人と愛す一子玉璽が傳 家道訓
○ 父の手本を記してさがばに古にみだるをえどひやろこ
うもいふる家のわざをうあそび縛くのちつるが、家常で
用ひし後赤漢和帝のじと家傳とさりのじとくじ
紙を康と名のゆゑをうけたが家傳とあく赤漢和帝
ちのあくの日本を推古天皇十八年と號すと墨微や
かのあく大字をばくと傳承たりとぞよひすと
歎くらひとあは上古の文をほむるをとて中古清和帝の

御書へかひへ後あるの御息和帝のつむこと
さう御書を集めて記述 経典書寫の御書を記述
御書を記述するに御書の御書とおもがの御書を記述す
水を取らるゝ所を御書を記述す
天工用物と云ふを還魂歌として記述す

○三省錄附言上巻



